

支援業務課 NEWS

I. 平成13年度経営診断結果の概要

本協会が実施している畜産経営技術高度化推進事業に係る平成13年度の診断結果がまとまりました。畜種別の概要は以下の通りです。

(酪農経営)

北海道以外の都府県で全国的に生乳生産量が減少している中で、新潟県の生乳総生産量についても88,303t(13年1~12月)と対前年比2.6%の大幅な減少となり、平成に入ってから最低を記録している。一方、診断事例(15戸)においても11戸で前年の成績を下回り、経産牛1頭当り年間乳量の平均が8,174kgに低下している。内容を見ると、繁殖成績の悪化から分娩頭数を確保できなかった事例や、後継牛不足、BSEの影響により経産牛の更新がうまく行かなかった事例等が見られ乳量低下の要因となっている。さらに、分娩間隔についても15.4ヵ月と年々延長し過去最悪の成績に終わっているため、分娩後の初回種付日数(92.7日)や1回授精による受胎率(31.0%)の改善が必要である。一方、経営面では、生乳や初生子牛の販売単価が前年を上回ったものの、個体乳量の低下による売上高の減少や購入飼料の値上がりによる乳飼比のアップにより約2/3の事例で経産牛1頭当り所得が前年実績を下回り、平均でも187千円と前年に比べ11千円程度収益性が低下する結果となっている。

区 分	単 位	H10	H11	H12	H13
経産牛1頭当り産乳量	kg	8,375	8,117	8,318	8,174
経産牛平均分娩間隔	月	14.5	15.0	15.3	15.4
乳飼比(経産牛当り)	%	42.7	42.1	40.7	42.0
経産牛1頭当り所得	円	173,136	164,681	197,645	186,919

(肉用牛経営)

平成13年の肉用牛経営診断結果は、13年9月に確認されたBSEによって繁殖経営、肥育経営ともに売上が減少して国による特別助成金が交付されたが経営成果は減少し、特に和牛肥育経営は厳しかった。

しかし、経営成果の上がらなかった要因にはBSE発生だけでなく、生産コストが高いことが経営を一層厳しくしている。生産コスト高の1つの要因には、粗飼料自給不足で飼料費が高いことも挙げられる。

経営毎の販売価格と総原価及び所得

(単位:円)

区 分	子牛1頭当り	和牛1頭(枝肉1kg)当り	乳交雑種1頭(枝肉)当り
販売価格	377,411	(1,796)	(997)
総原価	477,932	(2,105)	(1,061)
所得額	76,456	11,038	69,887
対前年比	64.6%	16.6%	77.3%

粗飼料自給・価格と生産費

(単位:円)

区 分	自給率(%)	単 価	1日当り給与量(kg)	乳交雑種1頭(枝肉)当り
繁殖経営	93.4	14.8	6.5	35,100
	68.3	41.2	4.4	66,170
和牛肥育経営	63.8	18.9	2.3	27,130
	0	43.5	2.3	62,430
乳交雑種肥育経営	65.7	21.3	1.4	18,130
	0	39.9	1.4	33,960

粗飼料のうち繁殖経営では26.5%、和牛肥育経営では80.1%、乳交雑種肥育経営では52.0%が稲わらであり、その大部分が国外からの輸入品である。

粗飼料価格のうえからも、また国外での口蹄疫発生が見られる今日、経営危機回避のうえからも是非稲わらの自給が望まれるところである。

(養豚経営)

平成13年の養豚経営はセーフガードの発動やBSEの代替需要等の要因もあり豚肉卸売価格は高値で推移し、コンサルでの枝肉販売単価・年平均は465円/kgと前年より14ポイント向上していた。飼養管理成績の繁殖部門では、3年連続の猛暑にもかかわらず年間離乳豚頭数は21.8頭となり前年より2ポイント向上した。肥育部門では事故率が6.2%となり前年より13ポイント上昇し悪化していた。所得は母豚1頭当り175千円と大幅な増益となり前年との比較では1.8倍の所得向上となった。

区 分	単 位	H10	H11	H12	H13
年間換算離乳豚頭数	頭	21.8	21.2	21.4	21.8
肉豚事故率	%	5.7	6.4	5.5	6.2
枝肉1kg当り総原価	円	451	421	407	414
種豚(♀)1頭当り所得	千円	76	86	95	175

II. 堆肥の生産と利用促進

生ふんを直接農地へ還元すると、『分解されやすい有機物(易分解性有機物)』が土壌中の微生物に急速に分解されて、土の中で大量の発酵熱やガスを発生させます。それが原因で植物の根を傷つけたり、酸素不足の土になったりします。

そのため、発酵熱やガスが急速かつ大量に発生する『分解されやすい有機物』の分解作用だけは事前に終了させる必要があります。つまり、堆肥化をしてから農地へ還元する必要があります。

土づくりとは(家畜ふん尿の評価)

肥料としては、化成肥料より劣る家畜ふんですが、実は、化成肥料には真似のできない優れた能力を持っています。『分解されやすい有機物』を事前に分解させた堆肥ですが、『ゆっくり分解される有機物(難分解性有機物)』は、まだ十分に残っています。微生物は、これらの有機物から養分を取って生活しますが、水びたしの土や乾いて固くなった土では生活できないため、自分達の生活しやすい環境を土の中で一生懸命に作って行き、最終的には土と水と空気がほぼ等分に含まれる微生物にとって理想的な土壌を作り上げます。このような土壌は、保水性・排水性に優れ、保肥力があって通気性に富む団粒構造となっており、植物にとっても理想的な土壌ですから、植物の根は生き活きと、たくましく十分に広がって行きます。

主な堆肥化処理方式

堆肥舎方式

床をコンクリート舗装し屋根をかけたもので、最も低コストで建設できますが、水分調整資材との混合や切り返し等の労力が必要です。床面から通気し発酵を促進させるものもあります。



Y町E農場

開放攪拌方式

混合や移送による切り返しによって家畜排せつ物を好氣的に分解・腐熟させて堆肥化を促進します。

水分調整したふんを深さ0.3~2m程度、長さ20~100m程度の発酵槽内で、攪拌機が水平方向に動く方式です。発酵槽は、長方形で往復攪拌するもの、楕円形や円形で攪拌するものがあります。発酵期間は30~50日が一般的ですが、冬場は発酵温度が低くなり、発酵期間が長くなる傾向があります。



S市K農場

密閉縦型発酵槽

主に養豚ふんの堆肥化施設として実績があり、安定した性能を持っています。

発酵槽は断熱材で被覆した円筒形の鋼板製容器を縦に設置した形をしているので設置面積がわずかで済みます。

発酵期間は2週間程度で水分調整をしないのが一般的です。オガクズ脱臭層と組み合わせた施設が普及しています。



A村S農場